

〔付〕――

任運荘の二十四時間

――まえがき――

任運荘で日夜働いている寮母に、「ある日の任運荘」を報告してもらいました。一人は平常勤務の姿を、もう一人には夜勤のあるがままを。昭和六十三年頃を中心とする記述ですので、本文中の数字や状況と多少ちがう点がありますので、予めお断わり致しておきます。

長いような 短いような一日――寮母・三浦恵美子

戦場のような朝

お年寄りの朝は早い。ホームの朝はなお早い。山室さん（八一歳）は、「四時になったら起こしに来ちよくれな」と言い、少しでも遅くなると、ナースコールで催促です。

目覚めても、自分では何一つ叶わぬ身だからです。

五時になると、もう皆が洗顔です。「ご気分いかがですか」。声がけながら、洗顔用の温かいタオルを配ります。洗面所に立てない二十六人分ですが、うち自分でできない十人は寮母が拭いてあげます。

小鳥のさえずるテープが流れるのが六時です。その頃はすっかり賑やかになり、洗面所も混んできます。私たち二人は東西二棟に分かれ、頻繁なナースコールに応じながら、着替えをし、車椅子に乗せます。Tさんのおむつ換えをしていると、ナースコール、とんでいきます。衛藤さんです。「今日はすっかり遅うなっち」と。ポータブルトイレ介助、それがすむと、くつ下、ズボン、上着などの着換え、そして車椅子へ。隣の西さんも、「おしっこにやっちょくれ」。先生、先生ノ！ 大声で呼びます。白石さんです。「わたしも顔洗いに連れち行っちょくれ」。もうすでにすんでいるのですが、白石さんには通じません。車椅子を押しして洗面所まで行き、洗面器にお湯を入れます。「これでいいんですかなあ」。何べんもそのくり返しです。気はあせるのですが、白石さんはちょっとした言葉にもすぐ逆上しますので、ゆっくりした風をしなければなりません。

おむつ報知機に「ツクシ3」と表示が出ました。交換したばかりのNさんです。広場で大声が上がります。Mさんです。「腹がへった！ 何んにも食べさせちもろうちよら

ん！」「食べさせてくれんじ、死ぬで！」。寮母室で温かいお茶とプリンをあげます。

また、ナースコール。Hさんです。「隣りんしが何か言いよるで」。Nさんのことを知らせてくれたのです。Nさんはいつも独り言をいい、奇声をあげます。Hさんも重度のほけさんですので、それを説明しても分かりません。「ありがとうございます、Nさんの用事はすみましたからね」。お礼を言って、次の部屋に走ります。

こうして四十人余りの方がもう朝食までに起きています。離床後のベットはすぐきれいに整理して、いつ帰られても気持ちよくしておかねばなりません。

祈り

目の回るような忙しさが終わる頃、礼拝堂でのお祈りが始まります。「車椅子押すな押すなで朝のお参り」山室スミエさんの歌です。

お経をあげ、軽い体操ののち、「人生は六十から」を高らかに歌います。

たまに、打ち明け話も出ます。三代さん（八三歳）は、「ゆうべ眠れんかった。死んだおじさんが夢に出てきた。わたしが台湾から引き揚げたとき、あいさつに行かんかったきに、わたしにたたりよるんじや、頭が痛うじたまらん」と。

「夢に出てくるのはあなたのことを案じているからです。叔父さんのご冥福を祈りまし

よう」と、皆で拝みました。翌朝、一袋のお菓子をお供えして、「頭の痛みが治りました。後で皆さんで食べておくれ」と言われました。

宿泊研修のお客さんにもあいさつをして頂きます。徳島の寮母さんは話は苦手なので、阿波踊りをしてくれました。その朝は賑やかな手拍子でした。

職員会議

まず、夜勤寮母から―「終末状態のKさんは、手足や足先にチアノーゼが見られますが、呼吸などに苦しそうなようすは見られません。酸素は〇・五で続行中です。体位変換は一時おきに行ないました。発赤などもありません」。

「Hさんが、何度も下痢をしています。腹痛の訴えはありません。正露丸を投与しましたが、まだ下痢が止まりません」。

「Sさんが精神不安定で、大声を出したりして、ほとんど眠っていません」。

看護婦から―「Nさんに排便剤を投与していますので、東居室担当の方は、気をつけて下さい」。「Fさんを十時に外科受診に連れていきますので、用意をお願いします」。「Hさんは、今日一日お粥にして、油こいものは止めて下さい」。

寮母主任からは、「Tさんの食事が、歯痛のため細食から極細食になっています。こ

うした連絡事項は、急変常ならないお年寄りの体ですので、とても大事なことです。

朝食は、八時から、第一食堂は自力の十人、第二食堂は半介助などの三十人が利用します。ここは隣りのお膳に手をのぼしたり、逆に、おかずを食べるのを忘れたりする人がいますので、目が離せません。

第三食堂は重度のボケさん四人が利用しています。みそ汁の中に牛乳を入れたり、手づかみで食べたりします。

Yさんに、「お腹がすいたでしょう。どうぞおあがり下さい」。どうしたのか、今日はお膳に目もくれず、「いりません」とそっぽを向きます。「おいしいですよ」。「おいしいから、あんたが食べりゃよかろう」。「私が食べても、Yさんのお腹はいっぱいにならないわ」。「いらんせわ」。話題を変えて、「今ね、息子さんのナルヨシさんから、ばあちゃんに、ごはんを食べさせて、と頼まれてきたの」。「ほう、ナルヨシがえ」。やっとこっちを向きます。

「ばあちゃんが、お腹をすかしているだろうから、早よう食べさせてと心配してましたよ。この味噌汁の葉っぱも、朝早くから寒いのに、とりにいってくれたの」。ようやく、「ああ、そうですな」と相植をうちます。「はい、おみそ汁ですよ」。「ああ、おいしい」と食べました。こんどは、「あんたは、なかなか御飯炊きがうまいなあ」と私をお

だてます。

残り四人は身体的に離床の出来ない方でお部屋で全介助です。この人達には一さじごと、「ごはんですよ」「おつゆですよ」と、声をかけながら助食をします。

全員清拭―朝食が済むと、入浴のない週四日間行ないます。二台の清拭車で、高温殺菌された清拭用のタオルが配られます。自分で出来ない方は寮母が清拭を行ないます。皮ふの弱い方や、いつも失禁しがちの方、寝た切りの方は特に念入りに、体の異状はないか注意しながら行ないます。湿疹や発赤などには、オリーブ油や薬をつけ、オムツ交換記録表にそのことを記入します。おむつ交換記録表は全員が目を通すので、早期治療にも役立ちます。

清拭のあと、下着の交換。自力でされる方は、はじめの頃は「昨日こそ風呂に入って着替えたばかりじゃ」。「そんなに洗濯をすると生地が傷んで勿体ない」と、なかなか応じてくれませんでした。しかし、今では「洗濯に出しちよくれ」と持ってきてくれるようになりました。

清拭は、皮ふを清潔にするということだけではなく、床ずれの予防にもつながる重要なお世話です。

役に立ちたい

清拭の終わったお年寄りには、ベットで横になったり、手紙をかいいたり、ホールでテレビを見たり、思い思いです。その中に、おしほりを巻いたり、干したり、食事用のエプロンをたたんでいるグループの姿があります。午前、午後の二回、十五人の方が大事な加勢をされていますが、今は六人です。でも、その側で見てくれる人たちが五、六人います。見ることも大切なお手伝いと私たちは考えています。

「おしほり巻きや、エプロンたたみがすまないと落ちつかない」。後藤スエ子さんの言葉です。

十一時頃 から二十分間、レクレーションみたいなりハビリがあります。内容は、その日の受け持ち寮母が自由に決め、歌やゲーム、体操、紙芝居など、いろいろのアイデアが、お年寄りに待たれています。「今日は誰がするの」。「この前のボール送りは面白かったで」。

お風呂が最高

家のお年寄りが、「お風呂は命の洗濯じゃ」と言っていたことを、懐かしく思い出し

ます。ホーム生活ではなおさらのことでしょう。食事と共に心待たれる二つの楽しみです。月水金の週三回です。午前中は普通浴で三十六人、午後は特殊浴で全介助の十四人です。

熱があると遠慮してもらいますが、「頭も痛くない、熱もない、入れたくないんじやろ」と反発されるほどおふろを好まれます。三枝さんは、前の晩から「あしたの風呂は一番先じゃあき、着替えを出しち用意しちよいちよくれ」と、楽しみにしています。居室ごとの順番制なので、全員が月に一度は一番風呂に入れます。

老衰化と共に失禁者も多くなってきました。そこで大腸菌などの細菌予防に、四年前（昭和六十年）に殺菌浄化装置が設置されました。「最後まで、澄みきったきれいなお湯でうれしい」と喜ばれています。これは東松山ホーム（埼玉県東松山市）が着目し、改善したことを知り、任運荘がそっくり取り入れたものです。大浴槽浄化のこの発見改善は、日本の社会福祉施設全部が採用すべき緊急事と信じます。

それでも大浴槽をきらう人には、別の一人浴槽を利用してもらいます。

家に帰りたいと半年間も泣き顔だった古庄直人さんは、特殊浴槽で介助していると、こう言うのです。「わしは、生きちよってん、死んじからも、ここにいるということ、皆に胸はって言うで」。思いがけない言葉に私たちは喜びました。古庄さんは今はここ

にすっかり落ちつかれています。

入浴日は一日の殆んどが、それに費やされ、夕方の四時にやっと終わります。その間、居室に残った二人の寮母が、排泄介助やおむつ交換、給茶、離床介助などすべてをします。

自由の時

「ちょっと頼みたいことがあるんじゃないけど、お風呂じゃから、忙しいわなあ。」「今度でいいわ、そう急ぐことじゃねえから」と言われると、「ごめんなさいね、あすはお風呂がないから、ゆっくり聞いてあげましょうね」と、申し訳ないと思いつつながら、次の仕事に移ります。

忙しいのでついお年寄りにはほったかしの状態になってしまいます。しかし、ベッドにぼつねんと座って外をながめている羽田野モエさんの手にはペンが握られています。うたでも詠んでいるのでしょうか。河原茂一郎さんも一生懸命、ノートに何か書き綴っています。もうじき五月祭です。そのとき発表する原稿を書いているのでしょうか。

「私は死ぬような辛い気持ちでここに来ました。ピアノカを若い人が手をとって教えてくれる。よい香りがして、こんな倅せがあってよいのだろうか」と、何かの折に発表し

ていたのを思い出します。九十七歳の河原さんです。ユーモアに富んでいます。清拭の時でした。「使いもしないのに、ここまでつれて来たばっかしに、ふかんならん」と、私たちを笑わせます。

首藤カツさん（八四歳）が手招きをします。近よると、窓の外を指して、「娘の持ってきたチューリップの芽が出ている」と嬉しそうです。子の心を幾度も幾度も胸の中で温めているのです。

風呂上がりの気持ちのよさか、ベッドでまどろんでいる人。テレビドラマに見入っている人。ただただ窓の外をみている人。友達の部屋をたずね仲良くお茶を飲んでいる人。自分だけの自由な時間があるようです。

こんな自由な時間を、任運荘は何よりも大事なものとして見守ります。しかし、お年寄りが安らかな自分だけの時間がもてるということは、私たちにいろいろの気配りが必要になります。

理事長は私たちにモニターニューの言葉を示しました。「妻もあつたがよい。子ももたねばならぬ。とくに健康をもたねばならない。でも、じぶんの幸福は、かかってこれにあるというほどまでに、それに執着してはならない。本当に自由で独りきりの暮らしが営めるような精神的裏座敷を一つとっておかねばならない。そうしておれば、何もか

も失せても、それをそんなに気にしないで行けるだろう」。

時に浮きたつことも

自分に沈静している人ばかりではありません。また、人間は何時までも沈静ばかりしてもいられません。広場にいる合沢さんは、そのテレビを見ようとせず、入浴介助の寮母さんが行き来きするのを目で追っています。不自由な言葉で、「はい、来い」「はい、来い」と手招きします。

だから入浴のない日は、できるだけ退屈しないように、音楽や短歌などのグループ活動や、日帰りドライブ、任運大学などの行事を行ないます。音楽グループで、「音楽をしますから、どうぞ」と道具をいくら並べておいてもだれもしません。私たちが音を出し、声を出していれば、「私もしてみよう」「あれくらいなら出来る」と、やる気になるようです。誘いかけは意欲を生み出す重要な要素だと思っています。

音楽グループ

「今日は音楽をします。ご気分によろしい方はご参加下さい」と放送します。早速、あちこちナースコールが鳴ります。「歌いに行きたい、起こしておくれ」。三十人をこえる

こともあります。それぞれに合った楽器を渡し、季節の歌、昔の歌、童謡、カラオケなどさまざまですが、今日は『ひなまつり』の歌です。楽器の音がしだします。

「何かおとろしゅうにぎやけえ、歌いよるんなら、自分も起きたい」と古庄トミさん（九八歳）。高齢の上、肺癌と診断されているので、私たちはいつも痛ましい思いをこめていたわかります。「歌よりいいもんがあろうか。悲しいときも嬉しいときも、歌うと心が落ちつき、せちいことも忘れるいい薬」。そして低い声で歌います。

耳の遠いSさんも、歌い始めるとタンバリンを上手に合わせているのです。そばで白石さんは「こんおじいさ、うまい。うんど（私）よりかうまいで」と、負けてたまるかタンバリンをたたいています。いつもオシッコオシッコと訴え続ける坂本さんも、車椅子から乗り出すように片手でカスタネットをたたいています。「坂本さん、危ないですよ」。「何んでもしんけんにせなあいけんのじゃ」と顔を真赤にしています。

いつもは無表情の人でも、知っている歌になると歌い出します。重い痴呆のMさんは軍歌となると、きちんと最後まで歌わねば止めません。

学ぶことも

任運大学というとか固苦しいようですが、これもふつうの暮らしに任運荘暮らしを

近づけようというお年寄りの意見から、発足したものです。「町には老人大学がある。ホームにもそれがほしい」。五十六年、後藤スエ子さんの提案でした。この三月（平成元年）で四十二回目を迎えます。ほけさんが九十％という任運荘なのにと、ひとはふしぎがるかもしれませんが、集まるだけでも心安らぐお年寄りが多いようです。ふつう、お茶とお菓子が出ますが、その有無に左右されないようで、いつも三十人余りが参加します。

理事長の短い講義があります。主として句や短歌や詩の短文芸を教材に使います。某日、啄木の、「たわむれに母をせおいてそのあまりかるきになきて三歩あゆまず」を説明すると、子供のないKさんは急に、「子はいらん、こんホームにおればいい」と大声で叫びました。子供のいるSさんは、「子供はいなければ淋しい」。二人の心の葛藤が繰り広げられ、聞いている人たちの胸にもジンと打つものがあつたようです。

某日の講義。放浪俳人・山頭火の「うどん捧げて母よ私も頂きまする」。自殺した母への思いを説明すると、お年寄りは胸をあつくします。特に眼を輝かしたのは、良寛と貞心尼との愛の歌のやりとりでした。

講座では別に四人ずつの老人の意見発表があり、一年間で全員に回ってきます。発表の順番がくると、何日か前から何を話そうかと考えています。発表できない人は私たち

が代弁して話しますと、本人は「ああ」と頭を振り、昔のことを思い出しているようです。

今は、うたの会の作品が中心題材です。

「Tさんの歌です。正月帰省の様子がよく出ていますね」と言いますと、「はい、私です。ここにいます」と、Tさんは小学生のように手をあげています。

経験発表では、言語障害の方は受け持ち寮母が代弁します。Fさんは耳が聞こえるが言葉がありません。手に一通の手紙を持っています。息子さんからの便りです。寮母が読みます。もうそれだけで、その日からFさんは誇らしげに車椅子で動いています。息子さんが会社で課長になったという手紙の内容でした。

石を与えては

当然のことですが「今日も生きてよかった」「明日も……」と思っていたただくための行事であり、サークル活動です。それどころか、老人ホームにいるから仕方がないと諦めさすようなことは罪なことです。

ここで、A・デーケンさんの或る所での話を思い出します。デーケンさんが音楽療法士の所に一人の患者をつれていった時のことです。私（デーケン）言いました。「この

患者は今、たいへんな抑うつ状態です」。すると、音楽療法士が「ではこの曲を聞かせます」と、自信たっぷりでした。聞いてから、患者はさらに抑うつがひどくなった。私は彼に聞いてみたんです。すると、彼は「この間失恋してね、その彼女の大好きな曲を今聞かされました」と。(『生と死を考える』63年1月号―黒田輝政氏主宰)

味わうべき話しです。それと似た話、それ以上に残酷な話を、老人ホームではしばしば耳にします。

旅の誘ない

ある詩人に、「旅にいれば家を想い、家に居れば旅を思う」という言葉があります。それがふつうの暮らしです。任運荘にも旅がなければ、とお年寄りから提案されました。昭和五十四年の春です。こうして年に一、二回にすぎませんが、老人ホームに閉じこめられたままの暮らしというイメージをすっかり取り払ってくれます。

それより六十三年三月までの九年間で、二十二回、延べ八十六人が参加されています。この一泊旅行に参加できない人のために「日帰りドライブ」があります。これは九年間で一一〇回、延べ参加者八百人余りが楽しみました。

もみじ狩り

ある秋のドライブ旅行に行けない人たちは十六人と十三人の二班に分かれて、もみじ狩りの小さい旅。めざすは大分と宮崎の県境・尾平峠で、道中の溪谷美に老いを忘れる。柿の実が赤い。「いっぱいになっちゃうのう。一つ分けてくれんじゃるか」という人。

「私んところ、もっとなっちゃうわー」と返す人。

「ここは渡辺キヲさんの村じゃが」。『そうな。たしか九十才で死んだ人じゃな』。山峡の流れに、「こりゃー透き通っちゃう」と叫ぶ。幼き日のことがよぎったのであろう。登りつめると眼下に天の岩戸の村。美しさと雄大さに、もはや声はない。

焼き肉の匂いと共に表情は動き、言葉もにぎやかに交わされ出す。いつもは細食しか食べない佐藤さんが肉をそのまま食べている。黙って食べる人。おしゃべりしながら食べる人。「おい、寮母さんたちののがうなるぞ」と心配する人。腹はいっぱい。長くは座っておれない。お昼寝だ。炭火と太陽で暖は十分。久保生いけさんがいみじくもその様を詠んでいる。

任運荘 みんな寝て見る 紅葉狩り

高峯さんも詠んだ。

焼肉を もみじの下で 食べにけり

満ちれば疲れも出てくる。帰りはおし黙ったままではあるが、それぞれの想いにふけ
っているようである。

後日、その日をふり返って佐藤ヨリノさんは句にとどめている。

あそこだと 我が家を下に 尾平行く

夕居る雲の薄れゆき

夕食は第一食堂の人は五時から、他の人たちは四時四十五分からです。夕食がすむと、
着替えをし、トイレ介助やおむつ交換をして、ベッドに寝かせます。夏ならば、窓から
まだ陽がサンサンとさしこんでいます。「おむつもきれいになったし、ゆっくり休んで
下さいね」。「もう寝るんな……」。返す言葉ありません。家であれば、まだ夕食もす
んでない頃ですもの。だからせめて七時には手作りのおやつを出して無聊がらうをお慰めして
います。

限られた職員でする最重度のお年寄りのお世話の限界です。普通の暮らしといいなが
ら、ここには普通でない暮らしがはっきり残されています。

早い就寝時間を遅くするために、ホールの夜のテレビはつけ放しにして、夜の娯楽番

組のために衛星放送装置もしてあります。まだ、一人の姿しか見られません。

古庄トミさんは夕食後、排尿介助をするたびに言います。「もう、おかえりですな」「あしたもお出るんですな」「来てくれるんですな。そりゃ、ありがとうございます」そして、しばらくは手をほどきません。森田エキさんも同じです。「ねえちゃん、もう帰るんな？」と心配そうにききます。「今度は夜勤の寮母さんが、森田さんのところに来てくれますよ」というと、やっと安心した様子です。

「幸ちゃんは、まだ迎えに来んじやろうか。帰りたいたんじゃが」と、何度も寮母室に来る日坂さん。私たちの帰り支度を見て、「私も一緒に連れち帰っちくれんじやろうか」といいます。

「そうねえ、日坂さんのお家は汽車でないと帰れないでしょう。今日は汽車が通ってないですよ。いつものように苦しい嘘をいわねばなりません。「そうじゃなあ、汽車が通らな仕方ないわなあ」と、ションボリしています。

夕ぐれは、いっそう家が恋しいようです。
古庄志義男さんのうた——夕ぐれはわが家のことのみ思い出し、胸がジーンとしてきます。

久住山は朝夕、任運荘を見守るように、おごそかにそびえています。この山を仰ぐお

年寄りの眼にも、深い想いがこめられています。久住山は万葉の時代は朽網山くたみとも呼ばれています。万葉の人が愛かなしい想いをこの山に託して詠っています。

朽網山 夕居る雲の 薄れゆかば 吾は恋ひむな 君が目を欲ほり
長かった一日。そして、私の長い一日の記を、この歌で終わります。

ああ夜勤があけた——寮母・後藤富美代

夜勤は二人で当たり、午後五時より翌日の八時三十分までです。出勤したら、玄関前の観音様に、「今夜も皆さんご無事でありますように」とお祈りします。五時より夕食介助。それが終わると、洗濯物やオムツを各人のロッカーに収めます。

五時三十分。看護婦より要注意者の状態報告を受けます。それと同時に火災についての注意事項三項目を二人で声を出して確認しあい、標示盤と消火器の点検をします。その後、東西のトイレ清掃です。

七時からおやつを配ります。このおやつは夕食が五時と早いので、せめて手作りのおやつを出し、長い夜の淋しさをカバーして戴くため開所以来から続いています。「失礼

します。おやつです」と声をかけて居室に入ります。「今日は何ですか」と聞かれます。「やせうま（郷土食）ですよ」。Aさんは「これがおやつのうちで一番おいしい」と嬉しそうに食べます。「なんだ、だんごか」と言う人や、「養命酒を飲ませて下さい」と言われる方もいます。おやつを助食していると、「もう田植えが始まっちゃるんな」と話しかけられます。向こう側のベッドの方で、ゴソゴソしはじめます。娘さんからの便りを読んでもくれと言うのです。こういいますと、いかにもものんびりムードのように見えるかもしれませんが、東京の松寿園の大火災があつてからは、夜勤者はもうこうしたのんびりした気持ちにはなれません。内心はびくびく不安です。防火訓練も夜間、抜き打ちが今では普通となりました。次は、ある夜勤の時の羽田野幸子寮母の手記です。

^{ほんもの}
本物の火事だ！

おむつ交換、おやつ介助、歯磨き（自分で歯磨きの出来ない入れ歯の方）がすむと、私たち夜勤者の夕食です。ほっとした瞬間、突然、頭上でけたたましい非常ベルが鳴り響き、二人とも同時に副受信機にはっと注目しました。東管理棟だと確認、一瞬、機械室、仏間、洗濯場が浮かぶ。二人は寮母室の消火器をもって東管理棟へ。「臭い、どこかが燃えているっ」。洗濯場の天井下からの煙が見えた。洗濯場だ、と思った。「こっち

が燃えているっ」。煙と全く関係無い方向で誰かが叫んでいる。

飛んで行く。浴場で威勢良く炎上する火を見た瞬間、驚きと恐怖で、後は何も分かりません。消火器の元栓を引き発射する。手は震え、ホースの先をしっかりと握ることはすっかり忘れていた。逃げ回るホースの先を必死で押さえる。火は消えた。隣の騰々舎夜勤者の三人を併せて五人で消したのです。後で分かった事ですが、ベルが鳴ってから現場へ駆け付けるのが一分。消火は三十秒でした。

利用者の方には訓練だったことを、当直者から放送され、一応ほっとしました。その時の当直者は施設長で、風呂場なら実際火を燃やしても安全だとお考えになったのでしよう。消火栓のホースのつなぎ方など再確認をし、休憩室へ帰りました。興奮は覚めず、食事する気にはなれない。訓練でよかった。でも、実際の火災発生を思うとき、夜勤の仕事の重大さに身震いする思いでした。(羽田野幸子)

理事長は、「警報の音を恐れずにそれになれよ、職員もお年寄りも冷静に行動する練習こそが大事」と言われます。お年寄りには、「ここは安全です。万一の場合でも寮母が命がけでお守りします」と言われますので、いよいよ身がひきしまる思いです。

深夜の作業

午後十時三十分より翌朝の午前四時三十分まで、交代で一人が三時間の仮眠に入ります。重症の方がおられる場合は仮眠をせず、二人でとびまわります。主な仕事はオムツ交換、尿介助、体位変換、水分補給です。

夜間オムツとポータブルトイレ介助を併用している方は二十人です。この方たちは、尿意の訴えがなく排尿間隔が長く、おむつを外すことを極端に不安がられる方々です。オムツがぬれていない時は、ポータブルトイレに座ってもらいます。「オムツより気持ちが良い。ありがとう」と礼を言われる方もいます。現在、排泄を訴えることのできないでオムツを当てている方は十一人です。私達はこうしたかたには特に、オムツがぬれたらすぐ換えるようにしています。五十人のお世話を二人の寮母がするのですから、まず、オシッコの出たのがわからない人を先に見ていきます。三十分以上ぬらさないために、オムツ交換記録表をつくり、三十分毎の時間帯に従って記入します。この表は、誰が見ても、排泄の状況がすぐわかるようになっていきます。オムツ換えにかかる時間は一人三分ほどですが、体位変換や水分補給をすると五分ぐらいかかります。夜間、ねむれないで、私たちが回っていくと話しかける方もいます。ゆっくり腰かけて話を聞いてあげたいと思います。楽呑みの水を飲ませてあげながら、「ごめんさい、いま私一人だ

から後で話をしましょうね」とその手を握りますと、しっかり握り返します。

もう少し時間があればと思ひながら、「おやすみなさい」と枕灯を消します。もう次の部屋の方のオムツが心配になります。

寝たばこ返上

ヘルペスに苦しむKさんはオリーブ油を綿花にひたし、足につけています。寮母の足音がすると、「ウ、ウ」「イ、イ」と足の痛みを訴えるうなり、声を高くあげます。近頃、精神的にも不安定です。整形外科で痛み止めの注射を打ったあと、すぐ、「もう一本打って下さい」といったり、痛み止めの薬を自分で薬局から買い、病院の薬とその薬をつづけて飲むのです。「体をこわしますよ」と、看護婦が病院の薬を預かうとすると、「他人の権限をとめることはできない、ぼくの薬を飲むのに何が悪い」と怒ります。

ナースコールでの要求もおおくなります。痛み止めの薬の要求に、「余り飲みすぎる」と体にわるいから」と断わると、「わたしをどんな人間と思っているのか、馬鹿にするな、園長をよべ、看護婦をよべ」と、はげしくどなります。

それにKさんはタバコを吸います。時どき手元がくるって、毛布や衣類に焼けこげをつくったこともあります。松寿園の火災をきっかけに、喫煙所を寮母室の前に設けまし

た。

松寿園の火災を施設全体で話し合いました。するとKさんは、「タバコはやめます。私のために皆さんに迷惑をかけたらいけませんから」といって、タバコとライターを寮母室に預けました。しかし、日がたつにつれてイライラがひどくなり、かくれて、タバコを吸うようになりました。昼夜私達はこの部屋を一番注意しています。

部屋に入ると、タバコを吸っています。「Kさん、タバコはおいしいですか。」「ぼくは足が痛い時、タバコを一口、二口吸うと痛みがなくなるんです。」「じゃあ、吸い終わるまで、一緒にいましょうね」。足を軽くさすりながら話を聞きます。「足が痛い時は大変ですね」と、優しくいたわります。すると、「このタバコとライターを預かって下さい」と、私に渡してくれました。「Kさん、吸いたくなったらいつでも言って下さいね。」「お願いします」と言われるのです。

さざ波は静まらず

現在（昭和六十三年三月）、任運荘では五十人中、重度の痴呆の方は十九人、中度は十三人、軽度は十一人、正常は七人です。

夜、Yさんが廊下の手すりにつかまりながら、ヨタヨタと歩いて出ていきます。私を

みると、

「あっ、おばさん、助けておくれっ」と呼びます。「どっこも、真暗でわかりません」とふるえています。「ごめんない、電気をつけましょね。さあ明るくなりましたよ、安心してやすんで下さいね」。枕灯をつけますと、両手をあわせて、「おおきに、おおきに」と言われるのです。明かりを消して不安を与えたことを反省しました。

しかし、ゆっくり反省するいとまがありません。あっちでもこっちでも人影が動き、心をやんでいる人たちの訴えは続きます。

県から、重度のポケで、異常行動のある人の数の報告を求められました。職員給増額の基礎にするためだそうです。しかし、ここには重度であってもひどい異常行動はもはや見られません。だから、調査報告にはゼロと書くしかありません。ある精神科医が、痴呆老人に異常行動があるのは、世話する方に異常があるからだ、と言っていますが、もっともな言葉と思っています。

夜があけてくると、洗面介助や寝間着から普段着への着替え、オムツ換え、トイレでのお世話などと、とても忙しくなります。

ポケさんのMさんは、せかすと排尿がとまります。心はあせるのですが、「さあ、もう少しね」とニコリ笑ってお世話します。Mさんも、「ホホホ、なかなか出らんわえ」

平成2年 1月4日 (木曜日) 13版 (10)



特別養老老人ホーム 任運荘(坂分班)

高齢者生活の心掛は、健康維持と心身の健康を大いに保つこと。

話題の老人ホーム

老人ホームは、高齢者の生活を支える重要な役割を果たしている。特に、特別養老老人ホームは、認知症や身体障害のある高齢者を対象とした施設で、専門的なケアを提供している。任運荘(坂分班)は、そのような施設の一つとして、地域に貢献している。

職員と一緒に訪問介護

訪問介護は、高齢者の自宅での生活をサポートするための重要なサービスである。職員と一緒に訪問介護を行うことで、高齢者の生活の質を向上させることができる。任運荘(坂分班)では、訪問介護のサービスを提供しており、高齢者の生活を支えている。

お年寄り同士の交流も

と、のんびりです。

眼のまわるような時間ですが、お年寄りの方から、「ごくろうさん、おつかれさん」の言葉をかけられると、みなさんご無事でよかったと、思わず頭が下がります。

しかし、よくよく考えると、感謝しなければならぬのは私です。不自由な体で晩年を生きる厳しさを、お年寄りは身をもって教えて下さっているからです。